

はしがき

「学問を外から取り入れるということにもまして、学問を内発的におこす時代」の到来を川勝平太は告げる。「グローバルな視野で考え、ローカルに行動する」、そんな「グローカロジー」こそが新しい「知」の体系には必須だと言う。「欧米地域だけを学ぶということが主流であった学問が終焉し、日本各地の身の丈に応じた学問を立てる時代になった」という厳粛な認識に基づいた、一貫した定見である。

かつて柄谷行人は、英文学畑において三人の批評家（福田恆存、江藤淳、吉田健一）は別として、英文学者に接するとすぐに愛想が尽きた、と溜息まじりに本音を洩らした。宮崎芳三は、日本の英文学研究は本来的に脆弱なものであり、そこに見られるのは「勤勉」だけで、自分自身を見失った国籍喪失の傾向が顕著だと裁断した。しかるにこんな英文学界にも今や学問のパラダイム・シフトが感じ取れるようになった。若い人たちの瑞々しい感性のなせる業であろう。

英語教育・英語学の分野では斎藤兆史が好個の一例となる。流行に一切左右されずに常に己の信念に則って発言している様子は清々しい。また、かの柄谷行人の一連の仕事、たとえばソーシャルや時枝誠記への言及なども秀逸である。そしてラドヤード・キプリングの日本旅行記を十四年の歳月をかけて全訳した英文学者・加納孝代の仕事も貴重である。

分野は違うが、水村美苗の作家活動も注目に値する。青柳悦子がみごとに解き明かしているように、水村の侮るべからざる力量に私たちは圧倒させられる。外国語教育と関連のある、母語・文学言語・早期英語教育・ネイティブ・スピーカー等の問題に寄せる気概と力、その志操には敬服せざるをえない。

オピニオン・リーダーたちによってこのように提唱され、実践されている「グローカロジー」は、実は何を隠そう、外国語教育の分野ではすでに平成三年から動き出しているのである。これについては岡戸浩子の著作に詳しいが、中曽根康弘首相のもと、昭和六十三年の臨教審の最終答申を受けて、英語だけではない、より多様な外国語教育が全国の高等学校のいくつかでスタートした事実を見落としてはならない。現に本学が平成六年、総合情報学部を創設した際、朝鮮語を新たに導入したのはまさしくこの「グローカロジー」の精神、すなわち地政学的な要因を考慮したうえでの英断だった。

外国語教育はとても奥が深く、幅と厚みもたつぷりとある。「多くのものを偏愛し、幅広い世界を持っている」（斎藤孝）魅力的な教師の指導のもと、学生は己の関心の赴くまま、たとえば外国語運用能力の鍛錬、地域言語文化の探求、日本外交の情勢分析、ネイティブ・スピーカーの発想の究明、そして言語と思考の考究へと翼を広げていってもらいたい。

究極的には「人間教育」に通じ、ものごとの本質に多角的な視点で向き合うことを促す「外国語教育」の世界に全力で飛び立とうではないか。

(外国語学部長 宇佐見 太 市)